

「ただ今、帳尻あわせ中」

尾又 亜希

んでしたが。しかし、日々の習慣となり、図書館へ行ってはあれこれと絵本を手にする機会が増えるにつれて、楽しんでいる自分に気がつきました。

柳田邦男様

初めまして。私は、小学二年生の一人息子をもつ母親です。日頃、子どもに本の読み聞かせをしています。もつともきっかけは、息子が赤ん坊の時、どんなに昼間外遊びをしたりしても寝つきの悪い子で、睡眠導入剤のごとく読むようになりました。そして現在に至るまでその習慣は続いております。最初のうちは、薄い絵本を二十冊近く枕元に積んでは、次から次と読み、子どもからは、「これ読んで。」、「これ、もう一度読んで。」とせがまれ、新米の母である私は、「さあ、お願いだから寝ておくれ。」と、念力を送る始末で決して余裕はありません

恥ずかしながら、私は子ども時分には本を読むことがほとんどなく、外を走り回ってばかりで、本といえば漫画を手取るぐらいでした。読書が好きと思えるようになった頃には、すでに高校生になっていました。それ故に、絵本や児童書の前を私は見事通り過ぎて大人になってしまったのです。

人生には、帳尻あわせがあるのでしょいか。今になって子ども時代をやり直しているような感覚です。おさばるように絵本や児童書を手にとっているのですから。親になるということはありがたいことです。特に寝つきの悪い子をもった親は。運命すら感じてしまいます。おかげ様で息子も本が大好きな子に育っています。「学校で

こんな本を見つけたよ。」とか、「この本の続編、図書館にあるかな。」など、こちらも負けじと面白かった本をすすめたりして。親子でそんな会話ができるとはと、息子の成長にじーんと感激したりするわけです。

そして、今さらながら本の面白さに目覚めたおばさんオーラを花咲じいさんのようにふりまきたくて、私は息子の小学校入学と同時に、学校で読み聞かせのボランティアを始めました。子ども達の反応は様々です。目をキラキラさせて物語に吸いこまれていく子。ドキドキ汗を握る場面になると主人公と一緒に息をのんでいる子など。本の絵と言葉の力に魅せられている姿はとても愛らしいのです。

ある時、私が小学一年生の頃のことを思い出しました。担任の先生がある物語をしてくれたのです。タイトルも絵も忘れてしまっていたのですが、ストーリーだけは心

に残っていたのです。親になってから、絵本に出会う中でその本を見つけた時の衝撃。今でも忘れません。欠けたピースが見つかって完成した爽快感とでもいいでしょうか。心のどこかにちゃんとストックされていたことも驚きです。

『おにたのぼうし』（作あまんきみこ、絵いわさきちひろ）でした。

節分の日、女の子の家では貧しくて豆まきどころが、その日の食べる物もなく、母親も病気で寝ている。オニのおにたは、豆まきをしていないこの家に隠れるも、女の子を気の毒に感じてしまうのです。帽子でツノを隠し、ごはんと少しの豆を届けてあげるといふ話。子どもながらやさしいオニもいるんだなと思ったものです。

息子や子ども達に読んでいる本が、一冊でも多く心の中に残るお手伝いができていたらどんなに嬉しいことで

しょう。今、せっせと絵本や児童書を読んで、発見したり、子どもの時に読んでいたらもっと感じ方が違っていただろうなと想像してみたり。埋めあわせるように楽しんでる自分を面白がっています。

柳田先生、このような機会を感謝しています。これからもたくさんの本に出会っていききたいと思っています。ありがとうございました。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

尾又さんは、学校でボランティアで読み聞かせをしている。自分が子どものころには、本を読むことがほとんどなかった。今、子ども時代をやり直すかのように、絵本の読み聞かせによって、自分の人生の「帳尻あわせ」をしているという。

もちろん、自分の子どもにも読み聞かせをしてきたのだが、

子どもは、「学校でこんな本をみつけたよ」などと言うほど成長している。

「(読んだ本が)一冊でも多く、息子や学校の子どもたちの心に残るお手伝いになるといい」というのが願望だと言う。こういう人々のささやかな活動が、とても大事ですね。